04・サキュバスのしっぽを生ハメされて、密着正常位で催淫液をたっぷり中出ししてもらう

本編03から、そのまま続き。

とある年の春。十時半ごろ。
場所は、主人公のおじ・おばが住む屋敷の客間。
天気は晴れ。気温は二十度程度。

主人公とメルヤ、ベッドの中で、裸で向き合っている。
メルヤ、興奮した呼吸で、主人公に近づく。

●正面　15センチ
「【※6回※　呼吸する。
興奮気味の、とても早く荒い呼吸。
ゆっくり呼吸しようとするが、ちっともうまく行かない。
どう考えても、まだまだセックスが続くだろう事を予期させる呼吸】

はぁ、はぁ、はぁ。
はーっ……❤
はーっ……❤
はーっ……❤」

メルヤ、主人公に近づいて、キスする。

●正面　0センチ
「【※1回※　キスする。
軽く唇が触れるだけの、だが、あまあまなキス】
ちゅ❤」

SE1　メルヤが身体を動かす音
【最初から最後まで流す】

〈主人公〉
「……これが、めーちゃんのしっぽ……？」

主人公、初めて間近で見るメルヤのしっぽについて、おずおずと、ドキドキしながら尋ねる。
答えが『はい』なのはもちろんわかっている。
だが、それでも質問せずにはいられないほど、それは独特な形をしていて。主人公には、あまりにも興味深いものだったのだ。
対するメルヤは、小さく頷きつつ、何だか照れくさそうにしている。
きっとメルヤにとって、しっぽをまじまじと見られる事は、とても恥ずかしい事なのだろう。
それは、人間である主人公にとっては少しピンと来ない事ではある。
だが、理解しきれていないからこそ、配慮が必要だ。
主人公はそれを肝に銘じつつ……メルヤと接していく。

メルヤ、会話するために、少し離れる。

●正面　15センチ
「【照れ笑いして、恥ずかしそうに。
主人公が、あまりにも興味津々で、そのくせメルヤを傷つけまいと配慮して、言葉を選んでいるようなので】

はい……こちらが、淫魔の尾です」

ＳＥ２　メルヤがしっぽを見せるために、開く音
【最初から最後まで流す】

●正面　１５センチ
「【少し恥ずかしそうに。
メルヤのしっぽは、普段は固く閉じて、ただの蛇のしっぽのように見せているので。
また、このしっぽの内側を他人に見せたのはこれが初めてなので】
このように……開いて。
私（わたくし）の意思で」

メルヤ、そう言うと、話しながらしっぽを動かし始める。

ＳＥ３　メルヤがしっぽを見せるために、開く音２
【最初から最後まで流す】
【０──１秒ほどまで流した後、残りを次の『メルヤ』のセリフと重ねて流す】

●正面　１５センチ

「【照れくさそうに、恥ずかしそうに。
メルヤのしっぽは、普段は固く閉じて、ただの蛇のしっぽのように見せているので。
また、このしっぽの内側を他人に見せたのはこれが初めてなので】
閉じたり……固くなったり、致します」

〈主人公〉
「こんな……風に、なってたんだ……」

主人公、息をのみながら、その光景をまじまじと見つめる。
主人公の目の前では、今、メルヤのしっぽがぬるり、くぽりと、淫靡な音を立てて開いたところだ。
それに主人公が、ごくんとつばを飲み込む間に、しっぽはまた閉じ。
そうかと思えば、また開いて。
とろとろに柔らかくなったり、ぎりぎりと硬くなったりして、変化する様を見せてくれる。
その度に催淫液がこぼれ落ちるのが見え、主人公の呼吸は興奮で荒くなった。

――あれを、今すぐ口に入れて。
丁寧に舐めて、口全体でたっぷりと可愛がってあげて、めーちゃんを悦ばせたい。
めーちゃんがわたしにしてくれたみたいに、気持ちよくしてあげたい……❤

そんな衝動が、主人公の心に込み上げてくる。
そのような視線を察したのか、メルヤはますますもじもじしている。
それは見られるのをためらい、恥じらっているくせに、もっと見てほしそうでもあって。
どこか期待した目でこちらを見上げては、また、そそくさと目をそらしたりもしている。
主人公はそんなメルヤの事をより愛おしく感じ……また、彼女が本当はどんな人なのか、次第にわかってきたような気がしてきた。

だから、主人公は推測する。

……つまりめーちゃんは、本当は知ってほしいんだ。
めーちゃんは今、わたし達が淫魔と人間で、種族が違う事に不安に感じているけれど。
本当は『自分がどんな女性か、わたしにもっと知ってほしい』って思ってくれてるんだ。
今までわたしはずっとめーちゃんの事を、実年齢よりも大人っぽくて、落ち着いた女性だと思っていたけど……。

本当はわたしと同じように、後ろ向きな事を考える瞬間も沢山あって。
それでもわたしに『もっと知ってもらおう』としてくれてるんだ。
そう思ったら、なんか……❤

主人公、このように思いを巡らせるうちに、メルヤの本当の気持ちが見えてきたような気がしてくる。
彼女を今すぐ抱きしめ、そのすべてを愛撫してあげたくなってしまう。

●正面　１５センチ
「【少し笑って。
照れくさそうに、恥ずかしそうに。
主人公の反応があまりにも素直で、可愛らしいので。
また、少し安堵している。
主人公は『怖がっている』というよりも『初めて見るものに、新鮮な驚きを感じている』という感じなので】
はい。
実は、このようになっていたのです。
【照れ笑いして。

また、これまでの苦悩を少しだけ述べてしまう。
心優しく素直な主人公に心を開き始めているので。
だが、この『苦悩』はメルヤにとって当然の事なので、特に暗い印象にはならない。
※隠していた事についてはさらっと言う感じで、悲壮感がないようにお願いします※】

ふふ。誰かにお見せするのは、これが初めてです。
今まではずっと。
人前では固く尾を閉じて。淫魔である事を、隠しておりましたから……」

〈主人公〉
「そうだったんだね……。
それでも、わたしに見せてくれたんだね……❤
ありがとう。すごく嬉しいよ。めーちゃん……❤」

主人公、思わず身を乗り出すと、メルヤの手を握り、真剣にお礼を言う。
少し大げさかもしれないが、その位感激している事を伝えたかったのだ。

メルヤはこれまで、正体を隠して生きてきたと言っていた。
それは、淫魔がこの地方では稀有な存在であり、それに伴う危険から、身を守るためのの

ものだったのだろう。
だけどこの度、メルヤは主人公のために正体を打ち明けてくれた。
その上、主人公にだけは、これまで誰にも見せた事のないしっぽの内部まで見せてくれるのだという。
これはメルヤに想いを寄せる主人公にとって、何よりも嬉しく、得難い贈り物だ。
嬉しくて嬉しくて、呼吸と一緒に涙がこぼれ落ちそうなくらいだ。
だから、その気持ちに応えないなんてありえない。
『自分がいかにメルヤの事が好きで、受け入れたいと思っているか』それを、今すぐ知ってもらう必要がある。
そう思ったのだ。

●正面　１５センチ
「【少し笑って。
照れながら、素直な自分の気持ちを話す。
メルヤがしっぽを見せた事について、主人公がとても感激しているようなので。
その反応に、とても嬉しくなってしまったので。
また、主人公が自分を安心させようとしてくれているのか、感謝の気持ちを伝えようとしているのか、とにかく手を握ってくれている事も嬉しい】

はい……。
ご主人様には、見て、頂きたくて。
私（わたくし）の事、もっと、もっと知っていただきたくて……❤
【おずおずと、自分のしっぽについて、危険性がない事を述べる。
不安はあるが、主人公に、どうか受け入れて欲しいので。
しっぽの開閉と、その中にあるものの事を、人間の口と舌に近い関係であると話す。
これまで通り、落ち着いて丁寧に説明しているようだが、内心は非常に緊張し、ドキドキしている】
少し珍しい見た目かもしれませんが、危険はございません。
人間の口と、舌のように捉えていただければ幸いです。
淫魔の尾は、口のように開けたり、閉じたりする事ができて。
中にある物は、舌のように柔らかく熱いのです」

〈主人公〉
「……あの」

●正面　１５センチ
「【少し驚いたように、おずおずと続きを促す。

主人公がこれから何を言おうとしているのか、見当もつかないので】
……え？」

だから主人公は、メルヤの手を今一度強く握ると、自分から一歩踏み込む事にした。
メルヤはおそらく、今、とても不安を感じている。
ここで主人公が少しでも拒絶するそぶりを見せたら、すぐにしっぽでの行為を取りやめてしまうだろう。
だけど主人公は、メルヤの全てを受け止めたいし、その欲望の全てに応じたい。
たとえそれが、未知のものであったとしても。
この身に受けて、もっと深い関係になりたい。
そう思っている。

〈主人公〉
「めーちゃんさえよかったら。
触らせてもらっても、いいかなあ……？」

●正面　15センチ
「【小さく、だが、とても驚いて。

かつ、感激した様子で。

まさか主人公の方から『触ってもよいか』と言ってくれるとは思わなかったので】

あ……❤」

その時浮かべたメルヤの表情は、つい数十分前と同じものだ。

泣きそうな顔で、でもこちらに期待をしている時の顔だ。

それを見て、主人公はまた泣きそうになる。

すぐに深く頷いて『期待していい』『応えるから』という気持ちを、少しでもくっきりと伝えようとする。

今の主人公は、何度考えても騎士とは言えないし、メルヤの恋人でもない。

当然、『ご主人様』と呼ばれるような存在では、もっとない。

でも『メルヤの事が好きで、これからもずっと一緒にいたいと願っている女性』である事だけは間違いない。

自分達の関係がこれからどうなっていくかは、主人公がこの気持ちを、いかにしっかりと伝えられるかにかかっているだろう。

先の見えない人生だが、隣にはメルヤがいて欲しいし、そう願う以上は、当然彼女を幸せにしたい。

たとえどんなに自分に自信がなくとも、それだけは、強く主張していくべきだ。主人公

はそう思っているのだ。

●正面　１５センチ

「【感情を抑え気味に、泣きそうな声で、嬉しそうに。
メルヤは今とても嬉しいし、感動している。
そして、それを主人公に伝えてもいいと思っている。
だが『感激のあまり、大声を出す』というのは違う気がしたので】
ええ……❤
ご主人様さえよろしければ、直に触れていただいて構いません。
【だが、だんだん抑えきれなくなってくる。
泣きそうな声で、嬉しそうに。
『ぜひ触ってほしい』という思いを伝える】
どうぞ……お好きにっ……❤
触って。下さいませ……❤」

〈主人公〉
「……うん。ありがとう……❤
じゃあ……触る、ね……❤」

SE４　主人公がメルヤに近づく音
【最初から最後まで流す】

こうして主人公は、メルヤのしっぽにそっと手を伸ばす。
いきなりつかむのはおかしいし、手のひらで撫でるというのも、ちょっと違う気がした。
だから、指先で優しく、ゆっくり。
ちょん、と触れてみる。
そうした瞬間、メルヤの心にも触れた気がした。

●正面　１５センチ
「【小さく、とても嬉しそうに、びくっと喘ぐ。
主人公に触れられて、とても嬉しく、また気持ちいいので。
先ほどメルヤは、淫魔のしっぽを『口と舌』の関係であると説明した。
だが実際は『足の間と性器』の関係であると言った方が正しいので】
あ……❤」

SE５　主人公がメルヤのしっぽに触れる音

【最初から最後まで流す】

SE6　主人公がメルヤのしっぽに触れる音2
【最初から最後まで流す】
【組み合わせたSEを繰り返して流す】
【次以降の『メルヤ』のセリフと重ねて流す】
【▲1　で一段階速度が速くなる】
【▲2　でフェードアウトする】

〈主人公〉
「……わ……❤」

今、主人公が触れた場所。
露出した舌のような部分からは、くぽくぽと催淫液が、とめどなくあふれている。
これは、メルヤの性的欲求が高まっている証だ。
主人公はこれに気づいて感激しつつ、今漏れてきた催淫液を、丁寧に、しっぽに塗り付けるようにして撫でていく。
そうするほどに、メルヤの呼吸はどんどん荒くなり、可愛らしい吐息を漏らす。

主人公の胸は、興奮ではちきれそうになる。

●正面　15センチ
「【※6回※　呼吸する。
荒い呼吸が、だんだん、ものすごくゆっくりになる。
『これは明らかに、ものすごく感じているのを耐えている呼吸。主人公の触り方が優しいので、何とか耐えられているのだろう』と理解させるイメージで】
はー……っ、はーっ……。はーーー……っ❤
ふううっ……❤
はーーっ……❤
ふーーーっ……❤」

〈主人公〉
「めーちゃん。痛くない？　大丈夫？」

それでも一番気にすべき事は『この触り方が間違っていないかどうか』だ。
しかしメルヤは小さく頷くと、目を細め、涙をにじませて微笑む。
その少し困ったような、でも嬉しそうな顔が可愛くて、主人公はもっとしてあげたくな

る。

●正面　１５センチ

「【※　※マークまで、呼吸を苦しそうにしながら、喘ぎ交じりに※
とても気持ちよさそうに、嬉しそうに。
主人公の言葉のうち『大丈夫？』の方に返事している】
ええ……❤
手で触れて頂くだけで、とても。
甘い刺激が、走るようでっ……❤
気持ちいいです……❤」※

〈主人公〉
「じゃあ、もうちょっとだけ、強く、するね……❤」

●正面　１５センチ

「【呼吸を苦しそうにしながら、喘ぎ交じりに。
ものすごく感じている中、なんとか返事している感じで】
はいっ……❤」

主人公、今度は、しっぽの敏感な部分を刺激する事を意識して、ぬりゅぬりゅと、上下に手を何度も往復させる。

泡立った催淫液を使って、メルヤの弱い部分を愛撫する。

しっぽの凹凸に手のひらが通る度、メルヤは甘い声をあげた。

▲1　ここで、SE6が一段階早くなる。

●正面　15センチ

「【低く、小さく喘ぐ】

あ。

【恥ずかしそうに、でも嬉しそうに。主人公がしっぽの先を、丁寧に撫でて、本格的に愛撫し始めたので】

そんな……っ❤

【高く、小さく低く喘ぐ。とても気持ちいいので】

あ……❤

【低く、小さく喘ぐ。

【段々低くなる】
ぁ。ぁ。
【高く、小さく低く喘ぐ。
とても気持ちいいので】
ぁあっ……❤
【※１２回※　呼吸する。
荒く、早い呼吸。
整えようとはしているものの、できず、さらに荒く、早くなる。
とても気持ちよく、我慢できなくなってきているので】
はぁ、はぁ、はぁ。
はぁ、はぁ、はぁっ……❤
ふーはぁ、ふーはぁ。ふーはぁっ❤
【低く、うわごとのように。
一行ごとに少し間が空くイメージで。
丁寧にゆっくり愛撫されて、ものすごく気持ちいい。
メルヤにとってしっぽを愛撫される事は、クリトリスを愛撫される事と同じなので】
あぁ、いいっ……❤
ご主人様……❤

気持ちいいです……っ❤

【低く、小さく喘ぐ。

同じ高さで喘ぐ】

ん❤

んっ❤

【ひとつ前より、少し高く喘ぐ。

軽くイッたような声が出る】

んうっ……❤」

〈主人公〉

「めーちゃん。すっごいかわいい……❤

気持ちいいんだね……❤

もっと。もっとしてあげるね……❤」

主人公、たまらなくなって近づき、メルヤにキスをする。

メルヤが自分の手で、こんなに気持ちよくなってくれている。

その事実に、深い達成感が、満足感が込み上げる。

●正面　０センチ

「【※１回※　キスする。

小さく音を立てるだけの軽いキス】

ちゅ❤」

メルヤ、会話をするために少し離れる。

●正面　１５センチ

「【嬉しそうに、泣きそうな声で微笑む。

主人公が夢中で自分のしっぽを愛撫してくれている事が、キスしてくれる事が、とても嬉しいので】

ふふ。

【嬉しそうに、泣きそうな声で。

自分のグロテスクな部分まで受け入れ、愛してくれる主人公へ感謝と喜びの気持ちを述べる。

『淫魔の部分』とは『しっぽ』の事】

ご主人様は。私（わたくし）の、淫魔の部分も。

こんなにも愛して下さるのですね……❤

嬉しいです。
【最後まで言いきれずに、耐える呼吸に移行する。
あまりにも気持ちいいので】
ご主人様に受け入れて頂けて。嬉しいです……っ❤
【高く、小さく低く喘ぐ。
とても気持ちいいので】
あ❤
【※6回※　呼吸する。
荒く、ものすごくゆっくりとした呼吸。
『これは明らかに、ものすごく感じているのを耐えている呼吸。本当ならもうとっくにイッているが、主人公にずっと愛撫していて欲しいので、何とか耐えているのだろう』と思わせる呼吸】
ふーっ……。
はぁっ……❤
ふううっ……❤
はぁ……❤
ふううっ……❤
はぁぁっ……❤

【低く、びくっと喘ぐ。
またも軽くイッてしまいそうなので】
ぁっ……❤
【高く、小さく低く喘ぐ。
軽くイッてしまう。
今回もあえなく達してしまい『もしかすると、自分はすごく敏感で、イきやすいのでは
ないか』と自覚し始める】
あぁぁっ……❤
【※8回※　呼吸する。
少し荒く、少し早い呼吸。
だんだん、ゆっくりになる。
苦しそうだが、とても満足げに。
イッた後特有の、とても荒い呼吸】
ふー、はぁ、ふー、はぁ。
ふー、はぁ、ふー、はぁ……っ。
【嬉しそうに。
感嘆の『あぁ』。
主人公の顔が近づいてきて、キスされるのだとわかったので】

あぁ……❤」

▲2　ここで、ＳＥ６がストップする。

二人、近づく。

●正面　０センチ
「【※１回※　キスする。
小さく音を立てるだけの軽いキス】
ちゅ❤」

〈主人公〉
「ご、ごめんねめーちゃん……！
もしかして、痛かった？　苦しかった？
わたし、つい興奮しちゃって……！」

主人公、このように積極的に愛撫して、キスまで繰り返しているくせに、途端に不安になってくる。

メルヤが感じてくれているとは思う。
思うのだが、あまりにも反応が良すぎる。
そのせいで逆に『もしかすると、あまりよくなかったのではないか』と、怖くなってしまったのだ。
しかしメルヤは涙目でふるふると首を振ると、早口で、切なげに訴える。
それはこれまで聞いた事もないような、切羽詰まった、欲情しきった声だった。

メルヤ、会話する為に少し離れる。

●正面　１５センチ
「【※マークまで、苦しそうな、興奮した呼吸で話す。
穏やかに、でも泣きそうなほど嬉しそうな声で。
主人公の手で達した事を素直に認め『もっとセックスがしたい』という気持ちを正直に述べる】
いいえ……❤
苦しかった、訳では、ないのです。
ご主人様のお気持ちが、嬉しくて……❤
こんなにっ、簡単に。

達してしまいました……❤
【できるだけ穏やかに、興奮気味に、切なそうに。少し早口で。
それでも、控えめに懇願する。
自分からおねだりするのは初めてなので。
『もう欲望を抑えられない』と言った感じで。
主人公によるしっぽへの刺激が気持ちよすぎて、また主人公の愛情が嬉しくて、我慢できそうにないので】
ねぇご主人様……。もう切ないです……❤
どうか。どうかご主人様の中で、メルヤの尾を慰めて下さいまし❤
ご主人様が欲しいのです。
メルヤを、受け入れて下さい……❤」※

〈主人公〉
「……！」

主人公、驚きで息をのみつつ、大きく頷いて、ずっと繋いだままでいた手を、再度ぎゅっと握りしめる。

こんな風におねだりされたのは、もちろん初めてだ。
自分達は、たった今までに何度も交わったが……これが、本当の意味での最初のセックスのような気がしてくる。
主人公もすでに我慢の限界で、もう、メルヤの事しか考えられない。
薬の事や、治療の事はもうよくて。
ただただ、メルヤともっと深くなりたい。
心が、その一種類の感情に占められていく。

〈主人公〉
「うん……❤　そうだよね……❤
し、しよう。しっぽとおまんこのえっち……しよう。
おいで……めーちゃん❤」

●正面　１５センチ
「【※息づかいのみ※　で表現する。
とても感激した様子で。
主人公が肉体的にも自分を完全に受け入れる覚悟がある事がわかったので】
……！」

メルヤと主人公、同時に近づいて、キスする。

●正面　０センチ

「【※1回※　キスする。
小さく音を立てるだけの軽いキス】
ちゅ❤
【※5回※　キスする。
お互いの唇をはむはむし合うキス】
はんむ……ちゅ❤　ちゅ❤　ちゅ❤　ちゅ❤
【※6回※　呼吸する。
荒く、とても早い呼吸。
喜びと興奮が、もう抑えきれなくなっている呼吸】
はぁ、はぁ、はー。
はぁ、はぁ、はぁっ……❤」

〈主人公〉
「はぁ、はぁ、はぁっ……❤

ふふ。大丈夫だよ、めーちゃん……❤
よ、横になったら、いいかな……？」

主人公が一度身を引いた事で、二人の距離は少し離れている。

●正面　15センチ
「【うっとりと、優しく。
でもちょっと、嬉しくて泣きそうな声で、ベッドに横たわるよう促す。
メルヤもまた『今、初めて主人公と、本当のセックスをしている』と感じ、とても嬉しくなっているので。
また、どれだけ目上の者として扱っても、ちっともえらぶらず、自然体のままの主人公の事を、ますます好きになっているので】
はい……❤
こちらへ……横になって下さいませ……❤」

こうして、二人の初めての行為が始まった。
経験がないなりに積極性だけは伝えたくて、主人公はまず、次にどうするべきかを尋ねる。

メルヤはそれを、微笑んで受け入れてくれる。
年上のくせに、『ご主人様』なんて呼ばれているくせに。リードひとつできなくて恥ずかしくなるが……。
『これも自分達らしいセックスなのかもしれない』と、主人公は思えるようになってきた。

ＳＥ７　主人公がベッドの上に横たわる音
【最初から最後まで流す】

ＳＥ８　メルヤが近づく音
【最初から最後まで流す】

メルヤ、主人公をベッドの上にあおむけにさせると、そっと跨って優しく見下ろす。
体勢が変わった事により、距離は少し離れる。

●正面　３０センチ
「【※６回※　呼吸する。
荒く、少し早い、とても興奮した呼吸。

メルヤとしては呼吸を抑えようとしているが、先ほどより少し距離が離れていてもわかる位、荒い】
ふーっ。はぁ。
ふーっ……はぁ。
ふーっ……はぁ……っ❤」

SE9　メルヤが主人公の足を開かせる音
【最初から最後まで流す】

SE10　主人公の股間の音
【最初から最後まで流す】

メルヤ、裸の主人公の足をそっと開かせ、股間に目をやる。
そこはすでに、のぞきこんで確認する必要もないほど濡れており、少し動かしただけで卑猥な音がする。

●正面　30センチ
「【うっとりと嬉しそうに。

メルヤ本人は抑えようとしているものの、かなり興奮した様子で。
主人公の足をそっと開いただけで『ぬちゃっ❤』といやらしい音がし、主人公の股間がとても濡れている事がわかったので】
あぁ……ご主人様の、ここも。とろとろになっておられます……❤」

〈主人公〉
「もう、めーちゃん……❤
は、恥ずかしいよ……❤
そんな、ま、まじまじと見ないで……❤」
恥ずかしがり、思わず目をそらしてしまう主人公を見て、メルヤは幸せそうだ。
だから主人公の顔はますます羞恥に染まっていって、それが、さらにメルヤを煽ってしまう。

●正面　３０センチ
「【うっとりと嬉しそうに。
メルヤ本人は抑えようとしているものの、かなり興奮した様子で。
これまで散々セックスをしたはずなのに、本当に初めてのように恥じらう主人公がとに

かく可愛らしく、愛おしいので】
恥ずかしい事なんてございませんわ。
嬉しいです……❤」

メルヤ、近づいて、キスする。

SE11　メルヤが身体を動かす音2
【最初から最後まで流す】

●正面　0センチ
「【※1回※　キスする。
小さく音を立てるだけの軽いキス】
ちゅ❤」

〈主人公〉
「ありがとう……❤
あ、あのね……めーちゃん。
わたし。

は、初めてだから。もし、痛がったら、ごめんね……」

だが主人公には、ここで伝えておかねばならない事があった。
主人公は処女だ。これまで膣に何かを入れた経験は一度もない。
こんな時まで予防線を張ってしまう自分が申し訳なくなるが……メルヤのしっぽを性器に挿入された時、自分の意思とは関係なく、痛がったり、怖がったりしてしまう可能性がある。
自分が痛い思いをするのは仕方のない事だと、主人公は思う。
だが、そのせいでメルヤを悲しませたくはない。
なので、少しでもトラブルを避けるため、話しておく必要があったのだ。

●正面　３０センチ
「【穏やかに、とても優しく。
『もちろん、承知していますよ』という感じで。
また、この言葉を受けて、淫魔のしっぽについて補足する。
しかしそれは、正確には『淫魔のしっぽは、メルヤの意思で自由自在に動き、感覚も敏感なので、かなり細かな調整ができる』というものである。
『絶対に人間を傷つけない』『セックスの上では万能である』というものではない】

はい……大丈夫です。
淫魔のしっぽは……人間を傷つけません。
受け入れて下さる方の形に合わせて、最適な長さに、太さに、硬さになって。
貴方様を楽しませる事をお約束致します。

【少し照れて、恥ずかしそうに。
主人公を安心させるために今はメルヤがリードしている。
だがメルヤも、本来はセックスについて詳しいとか、経験豊富だとかでは全くないので】

とはいっても、実際にこうするのは私（わたくし）も初めてですから……❤

【穏やかに、とても優しく。
自分の性経験について偽りなく述べつつ、主人公をさせたいので】

最初は少しずつ、ゆっくりと致しますね……❤」

SE12　メルヤが身体を動かす音3
【最初から最後まで流す】

SE13　メルヤがしっぽを動かす音
【最初から最後まで流す】

〈主人公〉
「……っ❤」

メルヤ、自分の背中側にあったしっぽを、そっと前に持ってくる。
それから器用に動かして、主人公の入り口の、すぐ前まで近づける。
その間にも、催淫液が垂れる。
初めてなのに、これからメルヤに残念な思いをさせないか心配なのに。
それを見た主人公は、とても自然な気持ちで、メルヤを受け入れたいと思っていた。

●正面　３０センチ
「【※６回※　呼吸する。
少し荒く、少し早い呼吸。
いよいよ主人公に挿入する事になって、できるだけ優しく、丁寧に扱いたいと考えながらも、興奮してしまっている呼吸】
はーっ。はーっ。
はー……。
はーっ……。はーっ……。
はーっ……❤」

メルヤ、正常位で主人公の膣に、自分のしっぽを挿入していく。

ＳＥ１４　メルヤがしっぽを挿入する音
【最初から最後まで流す】
【次の『メルヤ』のセリフと重ねて流す】

●正面　３０センチ
「【低く、小さく喘ぐ。
主人公の性器の入り口に自分のしっぽの先が触れ、とうとう挿入を始めたので】
んっ……❤
【※１回※　呼吸する。
とてもゆっくりとした、荒い呼吸。
浅く挿入するだけでとても気持ちよくなっている】
はぁぁあっ……。
【低く、こらえるように喘ぐ。
自分だけ快感に浸っていてはいけないので、耐えようとしている】
んっ❤」

〈主人公〉
「……っ！」

その時主人公が感じたのは、未知の快感だった。

……何これ。
こんなの、知らないっ……❤

と、ただただ正直な感想が浮かび、初めての圧迫感と異物感、温かさ。そして、快感に身を震わせる。
『痛がる』なんてありえない。
メルヤの言った通りだ。
初めてなのに、メルヤのしっぽが、自分にぴったりの形に変わってくれているのが、わかる。

ＳＥ１５　メルヤが挿入しながら動く音１
【最初から最後まで流す】

【組み合わせたSEを繰り返して流す】
【▲3　でフェードアウトする】

メルヤ、そんな主人公を刺激しすぎないよう、まずは軽く挿入しては、またぎりぎりまで引き抜く、浅い出し入れを繰り返す。

●正面　30センチ
「【※1回※　呼吸する。
とてもゆっくりとした、荒い呼吸。
浅い挿入を繰り返すだけで、とても気持ちよくなっている】
ふううう……❤
【照れ笑いして。
自分がリードするはずが、あまりにも気持ちいいので。
我を失いそうな事に照れている】
ふふ。やっぱり、熱い。ですね……❤
【※6回※　呼吸する。
ゆっくりめの、荒い呼吸。
快感で我を失わないように、必死で耐えている】

ふう、ふう、ふう。
ふーっ、ふーっ。ふー……❤
【低く、うっとりと。
主人公の膣内が気持ちよすぎるので。
メルヤは今、舌のように自由に動かせて、クリトリス並みに感じる、普段は柔らかいが、硬さと太さの調節まで利く器官で、ここに挿入している。
その快感にうっとりし、虜になっている】
あぁ……温かい……❤
ご主人様をこんなにも深く感じられて、嬉しいです……❤
【うっとりと快感に浸りつつ、主人公を気遣う。
主人公は今、どう見ても気持ちがよさそうだが、念のために聞いておく】
ご主人様……大丈夫ですか？
【『お辛くはありませんか？』と聞こうとして、途中で『最後まで聞くまでもない』と判断して微笑む。
改めて主人公の表情を見ると、明らかに気持ちよさそうなので】
お辛くは……ふふ、問題なさそうですね」

〈主人公〉

「うん……っ❤　だいじょう、ぶ……❤
めーちゃん……すごいね……❤
ちっとも痛く、ないし……❤
すごい、あったかくて、気持ちいいっ……❤」

●正面　３０センチ

「【低く、うっとりと。
安心した様子で。
主人公の膣内が気持ちよすぎるので。
主人公も自分と同じように快感を得られているようなので】
あぁ……❤　よかった……❤
【※６回※　呼吸する。
ゆっくりめの、荒い呼吸。
だんだん、荒いまま、ゆっくりになっていく。
快感で我を失わないように、必死で耐えている。
ひとつ前の呼吸よりも、さらにそれを意識している】
はーっ、はーっ。
はーっ……❤　はーっ……❤

はーっ。はぁーっ……❤

【低く、うっとりと。
幸せそうに。
だんだん、嬉しそうに、微笑み交じりになる。
だんだん、少しずつだが、主人公の快感を自分も何となく感じ取れるようになってきたので。
それは、他者の性的欲求を何となく感じ取る時と似ている。
なのでこれを淫魔の力なのだろうと察し、嬉しくなっている。
『どうしてほしいのか』とは『どのようなセックスをしてほしいのか』という意味】

あぁ……何（なん）だかご主人様がどうして欲しいのか、わかるような気が致します……❤

なるほど……これが、淫魔の力なのですね……❤
ふふ。

【低く、うっとりと。
喘ぎ交じりに嬉しそうに】

っぁ、快感共有とは……っ❤
こういう事っ、なのかも❤　しれませんね……❤」

〈主人公〉
「………❤」

▲3　ここで、SE15がフェードアウトする

SE16　メルヤが身体を動かす音2
【最初から最後まで流す】

SE17　メルヤが挿入しながら動く音2
【最初から最後まで流す】
【組み合わせたSEを繰り返して流す】
【次の『メルヤ』のセリフと重ねて流す】
【▲4　でSE18と切り替わる】

メルヤ、何だか主人公がしてほしい事がわかったような気がして、覆いかぶさって、左耳元で話しかける。
挿入しているのが長いしっぽである事から『性器に等しいもので膣内を攻めながら、たっぷり耳をいじめる』と言った事ができる。

主人公とメルヤ、密着正常位の体位になる。
これによって声の聞こえる方向が『正面』から『左』になる。

●左　０センチ
「【優しくうっとりと。
喘ぎ混じりに嬉しそうに、セクシーに。
声や行為はとても優しいが、主人公にとってはもう、有無を言わさずされるがままになる感じで。
これによって主人公が『ああ、今、自分は淫魔に犯されているのだ』とはっきり理解するような感じで】
では、まずは膣内（ちつない）に、私（わたくし）の催淫液をたっぷり塗りつけていきましょうね」

〈主人公〉
「……っ❤」

メルヤ、主人公の左耳にささやく。

★左　ささやき　０センチ　※マークのセリフまでささやく
「【優しくうっとりと。
喘ぎ混じりに、とても気持ちよさそうに。
主人公が感じている快感を、自分も感じ始めているので。
まずは優しく適度な部分まで挿入して、ぬちゅぬちゅと丁寧に催淫液を塗りつけていく】
そうすると……ほら……とても温かくて……敏感になりますでしょう?」※

メルヤ、主人公の左耳に話しかける。

●左　０センチ
「【低くうっとりと。
優しく喘ぎ混じりに、嬉しそうに。
とても気持ちがいいので。
比較的刺激がないように優しく挿入したのに、主人公の膣が早速しめつけてきたので】
ぁ……！
ふふ。とてもきつく締まりました……❤
メルヤのしっぽをお気に召して下さったのですね。

【うっとりと実感を込めて】
ご主人様、可愛い……❤
【※3回※　呼吸する。
少し早く、浅い呼吸。
とても気持ちがいいので】
はぁ、はぁ、はぁ。
【優しくうっとりと。
主人公が気持ちよさそうで安心するし、そのさまが可愛らしいので興奮している】
そのお顔を見ているだけで。
私（わたくし）、どうにか、なってしまいそうです……❤
【※6回※　呼吸する。
少し早く、浅い呼吸。
だんだん、意識してゆっくりになる。
とても気持ちがいいので】
はぁ、はぁ、はぁ。
ふう、ふう。ふーっ……❤
【うっとりと、独り言のように。
あまりにも気持ちいいので。

『はぁ』は感嘆の『はぁ』】
はぁ……すご……すごい……❤
すごい……っ❤」

〈主人公〉
「あぁっ……❤　めーちゃん。あの……っ❤
あのっ……❤」

主人公、あまりの快感についていけず、情けなくも、甘ったるい声を漏らす。
とても恥ずかしいけれど、なぜか嫌じゃない。
そんな気持ちに包まれる。

●左　0センチ
「【優しくうっとりと。
『はい。言わずとも承知しておりますよ』という感じで。
主人公がどうして欲しいか、手に取るようにわかってきたので。
『まずは、ゆっくり出し入れするセックスで、挿入感や異物感に慣れていこう』と提案する】

ええ。ゆっくり。ゆっくり致しましょう」

▲4　ここで、ＳＥ１７と１８が切り替わる。

ＳＥ１８　メルヤがしっぽを出し入れする音
【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す
【次のメルヤのセリフと重ねて流す】
【▲5　でＳＥ１８と切り替わる】

●左　０センチ
「【優しくうっとりと。
話しながらしっぽを動かし、その快感に酔いしれている】
少しずつ……少しずつこうやって。
浅い所から、ちょうどいい所まで入って」

▲5　ここで、ＳＥ１８と１９が切り替わる。

ＳＥ１９　メルヤがしっぽを出し入れする音２
【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す】
【次のメルヤのセリフと重ねて流す】
【▲６　で一段階速度が速くなる】
【▲７　でＳＥ２０と切り替わる】

●左　０センチ
「【優しくうっとりと。
話しながらしっぽを動かし、主人公が感じるさまを見て満足げにしている。
また、自分自身もとても気持ちいい】
そこから、抜けそうな位ぎりぎりまで、ぞりぞりと何度も往復して、慣らして。
こうやって……」

▲６　ここで、ＳＥ１９の速度が一段階早くなる。

●左　０センチ
「【少し興奮気味に、うっとりと。

少し荒い呼吸で。
話しながらしっぽを動かし、主人公と共に、ものすごく気持ちよくなっている】
奥まで、私（わたくし）を覚えていただいて。
【優しく。
『とん、とん。とん、とん』を、しっぽの動きに合わせて話しているイメージで】
とん、とん。とん、とんと優しくしっぽの先で舐めあげて。
ご主人様の気持ちいい所に、ご奉仕いたします……❤」

〈主人公〉
「あぁぁぁぁっ……❤」

主人公、メルヤのしっぽからもたらされる快感に悶え、だらしなく足を開いたまま、目に涙を浮かべてうっとりと涙を流す。
メルヤはそれを、とても嬉しそうに見て、より一層熱心に主人公の中を愛撫してくる。

●左　０センチ
「【優しくうっとりと。
主人公の反応があまりにも可愛らしく、また、間違いなく感じているようでホッとした

ので。
『主人公は気持ちよくなってくれている。自分は主人公と一緒にセックスを楽しんでいいのだ』という気持ちで満たされているので】
気持ちいいですか？
ふふ。
【※6回※　呼吸する。
早く、浅めの、静かな呼吸。
行為に集中しつつ、まだ少し余裕があるイメージで】
はぁ、はあ、はあ、はぁ。
はぁ、はぁ、はあ。はぁっ。
【※3回※　呼吸する。
ゆっくりめの、深めの、静かな呼吸。
だんだんゆっくりになる。
ひとつ前よりも余裕がなくなってきている】
はーっ。はーっ。はぁっ……。
【小さく息をつく。
何とか呼吸を整えて、長くたっぷりセックスを楽しもうとしている】
……ふう。

【※9回※　呼吸する。
ゆっくりめの、深めの、静かな呼吸。
だんだんさらにゆっくり、荒く、激しくなってくる。
あまりにも気持ちよくて、呼吸が乱れてきている】
はぁ、はあ。はぁっ。
はーっ。はーっ。はぁっ……。
ふー。ふーっ。
ふーっ……❤」

〈主人公〉
「あ。ぁ。ぁ❤」

●左　0センチ
「【優しくうっとりと。
嬉しそうに。
先ほどから、何となく主人公の感じているところを察して攻めていた。
さらにここで主人公の反応があからさまに変わった事で『ここが気持ちいいのだろう』
と確信したので】

あぁ……もしかして、これがお好きですか？
では、こちら、を」

メルヤ、主人公の弱いところを把握すると、そこばかりを丹念に、丁寧に往復し始める。

▲７　ここで、ＳＥ19と20が切り替わる。

ＳＥ20　メルヤがしっぽを出し入れする音３
【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す】
【次のメルヤのセリフと重ねて流す】
【▲８　で一段階速度が速くなる】
【▲９　でフェードアウトする】

●左　０センチ
「【優しくうっとりと。
『ずりずり❤　ずりずり❤』を少しだけ意地悪に。
これは『ずりずりと、適度な強さと速さで刺激する』という意味。

【メルヤは、主人公を攻める喜びに目覚め始めている】
沢山、ずりずり❤　ずりずり❤　として。差し上げますね……❤
【※5回※　呼吸する。
早く、浅い、静かな呼吸。
だんだんゆっくりになってくる。
あまりにも気持ちよくて、呼吸が乱れてきている】
はー。はー。はー。
はー。はー。
【※1回※　呼吸する。
特に気持ちよさそうに、ゆっくりと】
ふーっ……❤
【低く、小さく喘ぐ。
主人公の膣内が、ひときわぎゅっとメルヤのしっぽを締め付けてきたので】
んっ……❤
【低くうっとりと。
思わず、今の状況を『実況』してしまう。
主人公の膣内に、自分のしっぽが強く求められている気がして、とても嬉しいので。
また、主人公が無意識のうちにそのような反応をしている事を、主人公に知らせたいの

で】

あぁ……絡みついてくる……❤
狭くなっ。て。私を締め付けてきます……❤
【※6回※　呼吸する。
早く、浅い、少し荒い呼吸。
だんだん、さらに荒くなってくる。
あまりにも気持ちよくて、呼吸が乱れてきている】
はぁ、はあ。はぁっ。
はーっ。はーっ。はぁっ……」

〈主人公〉
「めーちゃんっ……❤　めーちゃんっ……❤」

主人公、メルヤにしがみつきながら、ただ、何度もその名前を呼ぶ。
初めての経験はあまりにも甘美で、意識を保つのも難しいほど気持ちいい。
それをメルヤと共有しているのだから、今にもおかしくなってしまいそうだ。

●左　0センチ

「【※マークまで、女性淫魔のしっぽの存在意義と、それに関する自分の想いを述べていく。
優しくうっとりと、興奮気味に。
主人公に話しかけてはいるが、どこか独り言っぽく。
気持ちよすぎて、すっかりとろけ始めている】
あぁ……ご主人様……❤
気持ちいい……❤
女性淫魔のしっぽがこのようになっているのは。
ありとあらゆる相手との行為に備えてのものと、聞いた事があります……❤
【小さくびくっと喘ぎ、言葉が一度止まる】
っ。
それを知った時はっ。
『そのような機会があるのだろうか』
『そもそも自分のような者が、誰かと結ばれる事があるのだろうか』
と思ったものですが……❤
今は、自分が淫魔でよかったと思います。
【うっとりと幸せそうに。
少し誇らしげに。
『自分が淫魔であるからこそ、主人公を気持ちよくできている』という自負があるので。

また、メルヤは主人公と結ばれた事で、ついに自分が淫魔である事を肯定できたので】
淫魔でなくては与えられない喜びを……ご主人様にお贈りできるのですもの……❤　※
【※6回※　呼吸する。
早く、浅い、少し荒い呼吸。
だんだん、さらに早く、荒くなってくる。
絶頂が近づいてきている】
はあ、はぁ、はぁ。
はあっ。はぁっ。はぁっ……❤
【優しくうっとりと、興奮気味に。
その位主人公の膣内が気持ちよく、メルヤもぼーっとして来ているので】
あぁ……ご主人様のおまんこが喜んで、くぽくぽ締め付けてくるのが、わかります……
❤
【※3回※　鼻で呼吸する。
鼻で深く、大きく吸いながら、快感を堪能しているイメージ】
す――っ。は――っ。す――っ。
【うっとりと幸せそうに。
これまで主人公としたセックスの中でも、今回はひときわ気持ちいいので】
凄く……いいっ……❤」

〈主人公〉
「めーちゃんっ……❤　わたしっ……❤
わたしもうっ……❤」

ＳＥ２１　メルヤが身体を動かす音３
【最初から最後まで流す】

メルヤ、主人公の言葉を受けて、正面に向き直る。
これによって声の方向が『左』から『正面』になる。

●正面　１５センチ
「【うっとりと幸せそうに。
今にもイきそうな主人公を、正面からうっとりと見下ろしているイメージで。
そしてまた、主人公の膣内を『実況』する。
意地悪な行為だとわかっていても、とても興奮するので。
また、恥ずかしがる主人公がとても可愛らしいので】
あぁ……ご主人様……❤　可愛い……❤

もう達しそうなのですね。
ご主人様は、中も敏感で、本当に可愛らしい……❤」

〈主人公〉
「このままっ……❤　このまま❤　このましてね？
めーちゃんの催淫液っ❤　お腹にほしいっ❤」

●正面　15センチ
「【※マークまで、はぁはぁと荒い呼吸で、うっとりと幸せそうに。
少しだけ早口で。
とても興奮している。
たとえ、主人公の身体にとってプラスしかない催淫液であると言えど『中出し希望』をされて、激しく興奮したので。
主人公はおそらく無我夢中で、事の重大さに気づかずに言っているのだろうが、それが余計にメルヤを煽るので】
ええ、勿論です。
このまま沢山、ご主人様の中に。
たっぷり催淫液を注いで差し上げます。

では、ご主人様の気持ちいい所を、沢山擦って差し上げますね。
もっと気持ちよく、なりましょうね」※

▲８　ここで、ＳＥ２０の速度が一段階早くなる。

●正面　１５センチ
「【※６回※　呼吸する。
とても早く、浅い、荒い呼吸。
だんだん、さらに早く、荒くなってくる。
主人公の言葉によって、激しく興奮しているので】
はぁ、はぁ、はぁ。
はぁ、はぁ、はぁっ❤」

〈主人公〉
「このままっ……❤　このまま❤　このましてね？
めーちゃんの催淫液っ❤　お腹にほしいっ❤」

●正面　１５センチ

「【はぁはぁと荒い呼吸で、うっとりと幸せそうに。
少しだけ早口で。
メルヤももうほとんど余裕がない。イきそうになっている】
ええ……どうぞ……いつでも……いつでもイって下さいませ。
【※6回※　呼吸する。
とても早く、浅い、荒い呼吸。
イきそうなのをこらえる呼吸】
はぁ、はぁ、はぁ、はぁ。
はぁ、はぁ、はぁっ❤
【低く、小さく喘ぐ。
イきそうなのを悟る。
主人公の膣内に、よりきつく締め付けられ、それが強い刺激になったので】
ぁ……❤」

〈主人公〉
「あぁぁぁぁっ……❤」

こうして、主人公は達した。

あまりにもあっけなく、何の痛みも恐怖もなしに、ただただ深く愛されて、快感の果てまで導かれた。

●正面　15センチ

「【低く、小さく喘ぐ。イく事を受け入れる。主人公が達して、自分ももうイってよいと判断したので】

んっ❤

【低く、小さく喘ぐ。イく直前。低い声で、かわいく喘ぐ。同時に、催淫液がどろどろと溢れ主人公の膣内に大量に出される】

んううっ……

【※ここで達する※低い声で、こらえるようなイき声。かわいく喘ぐ】

く❤」

▲9　ここで、SE20がフェードアウトする

●正面　１５センチ
「【※１６回※　呼吸する。
とても早く、浅い、荒い呼吸。
イった後特有の荒い呼吸。
段々、少しずつゆっくりになり、　呼吸が整っていく】
ふーはぁ、ふーはぁ。
ふーはぁ、ふーはぁっ……。
ふーはぁ、ふーはぁ。
ふーはぁ、ふーはぁっ……」

〈主人公〉
「はぁ、はぁ、はあ、はぁっ……❤」

ほどなくして、メルヤも達する。
メルヤ、絶頂してぐったりする主人公に微笑むと、再び左耳側に頭を置き、主人公の左耳に話しかける。
これによって声の方向が『正面』から『正面』になる。

●左　０センチ
「【とても優しく、嬉しそうに。
でも、どこか淫靡に。
主人公の呼吸が落ち着いたのを見計らって、たっぷりと膣内に催淫液を流し込もうとしているので】
ほら……ご主人様の大好きな催淫液です。
ふふ。ご主人様がきゅうきゅう締め付けてくるものですから、沢山、溢れてきております……。
お腹一杯……堪能して下さいましね……❤」

メルヤ、言うと、主人公の膣内に、たっぷりと催淫液を放出する。
それもまた主人公には初めての経験だったが、あまりにも自然な行為に思えて、主人公は何の疑問もなく受け入れた。

SE22　メルヤが催淫液を主人公に流し込む音
【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す】
【次の『メルヤ』のセリフと重ねて流す】

【▲１０　でフェードアウトする】

メルヤ、主人公の左耳にささやく。

★左　ささやき　０センチ　※マークのセリフまでささやく

「【とても優しく、嬉しそうに。
でも、露骨に淫靡に。
『自分は今、主人公の体内にマーキングしている』という自覚を持っていっているので】
びゅーっ❤　びゅーっ❤　びゅー……❤」※

▲１０　ここで、ＳＥ２２がフェードアウトする

メルヤ、そのまま主人公の左耳にキスする。

●左　０センチ

「【※１回※　キスする。
耳のふちに、軽くキスする】
ちゅ❤」

メルヤ、再び主人公の正面に向き直り、優しく見下ろす。
これによって声の方向が『左』から『正面』になる。

●正面　１５センチ

「【※１２回※　呼吸する。
早く、浅い、荒い呼吸。
イった後特有の荒い呼吸。
段々、少しずつゆっくりになり、呼吸が整っていく。
ひとつ前の呼吸よりはゆっくりになっている】
ふーはぁ、ふーはぁ。ふーはぁ。
ふーはぁ、ふーはぁ。
ふーはぁ……。
【※１回※　呼吸する。
とてもゆっくりと息を吐く。
とても満足げに、とても幸せそうに】
ふううっ……❤」

メルヤ、近づいて、主人公にキスをする。

●正面　０センチ
「【※1回※　キスする。
軽く唇が触れるだけの、だがあまあまなキス】
ちゅ❤
【とても優しく、嬉しそうに。
そして満足げに。
このセックスを経て、主人公と決定的に深い関係になれたという確信があるので】
お疲れ様でした……❤
初めての事をたくさん経験されて、大変でしたでしょう……❤
少し休みましょう」

メルヤ、主人公の左耳にささやく。
これによって声の方向が『正面』から『左』になる。

★左　ささやき　０センチ　※マークのセリフまでささやく
「【とても優しく、嬉しそうに。

幸せそうに、うっとりと】
大好きですよ……ご主人様……❤」※
ここでフェードアウトして終了。